

第3回



入選作品集

令和元年7月
一般社団法人 家の光協会
記事活用促進部

■ ■ 総 評 ■ ■

「家活グランプリ」も第3回を迎え、「家の光三誌」の記事活用をとおして、JAを核とした本・支店協同活動や組合員組織活動の活性化、生活・地域・文化の振興に日々取り組まれていることを意味する「家活」という言葉もJAグループの中でずいぶん浸透してきたように思います。

今回の応募作品もさらにパワーアップしており、やはり審査は難航いたしました。とくに今回印象的だったのは、応募者それぞれが「家の光三誌」の記事活用を「人と人をつなぐツール」としてフルに活用されていること、そして、記事活用こそがJAと女性組織、組合員とをつなぐだけでなく、JA事業のスムーズな遂行、さらには地域に根ざしたJAにつながると考えておられる点でした。換言すれば、教育文化活動をJA職員が支えることでJA自体の活性化、自己改革につながるということだと思えます。

審査員一同は、こうしたJA職員のみなさんの日ごろの努力に改めて敬服するとともに、受賞者を含め、応募してくださったみなさんの活動がさらに発展されることを期待しています。

審査委員長 東京農業大学 教授 上岡 美保

【第3回「家活グランプリ」審査委員】

審査委員長 東京農業大学 教授 上岡 美保

審査委員 長野県JA松本ハイランド 元支店長 百瀬 康子

家の光協会 代表理事専務 高杉 昇

家の光協会 家の光編集長 白崎 豊士

※肩書きは審査会当時・敬称略

* 目 次 *

【最優秀賞】

○「家活でフレミズに笑顔を」

沖縄県 J A おきなわ 組織活性部 栢野 英理子 3

【優 秀 賞】

○「過去から学び明日につながる家活」

宮城県 J A 加美よつば 生活部 生活課 千葉 隆子 6

※部署名は応募当時

○「いつも気づけば近くに『家の光』」

宮崎県 J A 西都 生活組織課 清家 祐子 9

【佳 作】

○「Yes! わたしの『家活』！」

千葉県 J A かとり 指導経済部 営農生活課 石毛 明人 11

○「『家の光』で夢がかなった」

静岡県 J A 遠州中央 森営農センター 鈴木 美紀 14

○「開けばワクワク、広がるイキイキ」

鹿児島県 J A さつま日置 生活福祉課 笠野 恵子さん 17

※「家の光用字用語集」にもとづき、本文の表記を一部変更しています。

家活でフレミズに笑顔を

J Aおきなわ 組織活性部

栢野 英理子

J Aおきなわ女性部は部員数約9,000名、その中でわたしの担当するフレッシュミズは、約500名で全体の5%という状況です。フレミズはわずか数名という支店もあり、支店での活動は難しいのが現状です。

そこで、3年前に各地区フレミズ代表者と話し合った結果、沖縄のフレミズ活性化のために、まず県での活動を盛り上げて人を集め、地区そして支店へと展開していこうということになりました。

県で行っている活動は、おもに3つ。スポーツ交流会、フレミズ集会、そして「おきなわ花と食のフェスティバル」への出店です。

スポーツ交流会は今年で4回め。当初は地区対抗のソフトバレーボール大会でしたが、「他地区ともっと交流したいね」と翌年には混合チーム制に。「パパや子どもたちも楽しんでほしいね」と、次は運動会コーナーを設け、「バレーが苦手な人も参加してほしいね」と綱引き部門をさらに追加と、毎年楽しい工夫を重ね、参加者を増やしています。

フレミズの集まりには、『家の光』に連載されていた「5分でいきいき楽しいゲーム」をかならず取り入れます。「電線じゃんけん」（2018年10月号）「こんにち顔合わせ」（2017年8月号）「タコとタヌキ」（2017年5月号）など、スキンシップがあり単純だけど失敗しやすいものを選ぶようにしています。握手し笑い合うと、初対面でもすぐに仲間になれるからです。

スポーツ交流会で「ラッシュアワー」（2016年9月号「わたしたちの運動会」）を行ったことがあります。紙テープ製の輪を切らずに中に何人入れるかを競うゲームです。女性部員さん10人を想定して輪を準備したのですが、フレミズのみなさんの体は思ったより細く、どのチームも全員すっぽり収まってしまい、勝負にならないよ～とつっこみの嵐。かえって大笑いにつながりました。

フレミズ集会では、女性組織学習冊子「みんなで学ぼう J A女性組織」を活用し「発見してみよう！ 女性部のスゴいところ」と題したワールドカフェを行いました。まずは女性組織の歴史漫画を黙読してもらい、女性部のスゴイと思ったところを席替えを繰り返しながらグループ内で発表し合う形式です。講義だと堅苦しくなりが

ちですが、漫画を読んで感想を言い合うスタイルは「女性部の団結力すごいね」「わたしたちもこれやってみよう」と、気づきとともに意欲が芽生えたように感じました。その後、女性部役員を助言者として全体討議を行いました。役員への質問が止まらず、先輩の体験談がおもしろかったと評判だったことは、世代間の架け橋になる取り組みだったのではないかと感じています。

さて、今年初の試みとして映画「いただきます～みそをつくる子どもたち」の上映会を開催しました。この映画は『はなちゃんのみそ汁』の主人公、安武はなちゃんの通っていた高取保育園の、園児によるみそ作りと和食給食の様子を描いたドキュメンタリー映画です。

女性部PRのための工夫を話し合い、取り入れたのは、「みそ玉」（2017年4月号）です。女性部手作りのみそで作ったみそ玉をお土産に渡せば、忙しいママも簡単に安全なみそ汁が作れること、なによりみそ作りが中心の女性部活動に関心を寄せてくれると思ったからです。

材料のみそは各支店女性部から提供いただき、前日までに各地区で作ったみそ玉はなんと1,500個。それを当日会場に持ち寄り、味比べを楽しめるよう、それぞれ支店名のシールを貼り、1人3個ずつかわいくラッピングしました。

上映会はチケット完売、434名を集客。一般参加者が136名も来てくださったことは、食への関心の高まりを感じるとともに、女性部活動の魅力と可能性を再発見した気がします。休憩時間には、フレミズが講師となって、子どもたちと「ふるふる芳香剤」（2017年7月号）を作り、交流しました。

上映会当日、参加者にみそ作りを体験してもらいたいと、家の光図書『はなちゃん12歳の台所』掲載の「わが家のみそ」レシピを使った「はなちゃんみそ手づくり講習会」を募集したところ、親子20組がすぐに定員に。

講習会当日は、親子50名が集まりました。ゆでたダイズのいい香りに包まれながら、手づかみでダイズをつぶし麴と混ぜ、タッパーに詰める。子どもたちはこねる作業が大好きなので大喜び。みそ作りの後は、「フェルトの花の小物」（『ちゃぐりん』2015年5月号）の中からカードを作り、交流しました。この取り組みで、『はなちゃん12歳の台所』17冊を販売、4名に女性部に加入いただきました。

講習会から半年たった先日、参加者からメールが届きました。「待ちに待ったみそができたので豚汁を作ってみました。上映会・みそ作りをとおして、食にたいす

る家族の考え方がガラリと変わりました。夕食前には「かつお節削っていい？」と長女がいつの間にかみそ汁担当に。家族の幸せが増えました」という内容に、フレミズと共にうれし涙。

上映会の取り組みは、上映会に来た青壮年部の呼びかけで、支店・青壮年部・女性部の共催により石垣島でも満員御礼で開催され、フレミズ中心に保育園へみそ玉の出前授業に出向くなど、地域へと広がりを見せています。

今後も『家の光』を活用し、フレミズ・地域に笑顔！ 笑顔！ 笑顔！ を届けていきたいです。

過去から学び明日につながる家活

J A加美よつば 生活部 生活課

千葉 隆子

わたしは本部事務局として四支部と連携を図りながら事業を展開していますが、『家の光』のあふれる情報、あふれる文章から知識を得られ、たいへん重宝しています。だからこそ、バックナンバーや図書もつねに手の届く所にあります。

そんななか、「わたしはどれだけ活用しているの？」と、過去3年間の状況を把握。そこから見えてきたのは、未活用や忘れかけている活動があることでした。なかでも「JA家の光クッキング・フェスタ」は9年間開催がないことに気づきました。そこで、本部役員会に活動強化リスト6項目を提出し、支部がバランスよく取り組むことを協議・決定しました。なぜなら「お互いの活動を理解し共有することで、組織全体の底上げになる」と考えたからです。

まず、平成29年11月、本部活動として「JA家の光クッキング・フェスタ」を行政や学校と関わりながら開催しました。職員のふれあい訪問や秋まつりで呼びかけるなどして周知し、女性部員にも参加を募り、情報機関にも告知。講師に枝元なほみ先生をお迎えし、スタッフは世代間交流を図るため女性部員・フレミズ・女性大学受講生にお願いしました。また、『家の光』を寄贈している地元農業高校と「地域食文化伝承の理解を深めたい」とコラボを計画。生徒のスケジュールを調整していただき、12名が参加。農畜産物の提供、農についての意見発表や地場産食材を使ったスープの紹介など、お互いの活動を通じて食に携わる人の立場や、意見を尊重することのたいせつさを学びました。

スタッフの反省会では、「会場が狭くて、身動きがたいへんだった」などの意見もありましたが、「今度は、おらいの地域でやりたい！」といった声が上がりました。そこで平成30年11月、「支店協同活動」として、支店長を中心に、女性部といっしょに独自フェスタを開催。講師は部員の元栄養士にお願いし、『ちゃぐりん』2018年2月号から具だくさんのミルフィーユ鍋を作りました。料理教室で普及させた「ほくほくなべ」を、アフターフォローで使い大好評でした。エコーマーク品の普及を兼ね、「ほめられ酢」を使って旬の野菜をピクルスにし、また「JA家の光クッキング・フェスタ」オリジナル人気料理112選から「ゆでキャベツの梅サラダ」を選び、事前に女性大学料理教室で試作・試食したことで、子どもの同伴参加につながりました。

スタッフは女性部員と職員から募り、いっしょに体験することで理解が生まれ、とくに若い職員にはよい経験となり、支店運営に生かされています。参加者には『ちゃぐりん』を配布し、開催の話題といっしょに新規購読に期待しながら、声かけを欠かさず続けています。

「やればやるほど、やりたいことが見えてくる家活」。2018年7月号を活用し、青年部女性部合同研修会として役職員といっしょに鳥獣被害対策を学び、百歳元気プロジェクトとして、地域住民といっしょにウオーキングを楽しみました。

とくに3日間の高校生の職場体験の教材として、誌面に掲載された「夢をかなえるおらいの加美よつば」は大活躍でした。1日目には「みなさん『家の光』を知っていますか」と挨拶を兼ねてJAを紹介。2日目、連載「OH! 農! 熱血ハイスクール」を話題にコミュニケーションづくり。3日目、作業の合間に読書タイム。最後に感想を書いてもらおうと「将来が明確でない中学生と交流を行うことで、農業に携わる職業に就く人が増えるのではないか」「JAの教育文化活動に、地域の方々の交流や関わりの深さを感じました」などのコメントが寄せられ、JAの課題と魅力を知ってもらう機会になりました。

いっぽう、女性部本部役員は、「わたしたちが愛読する『家の光』はどんな人たちがどんなふうに住んでいるの？」と興味津々で、役員研修会として12名で家の光協会を訪問。編集部のみなさんの情熱を身近で感じ、技術と知恵が詰まった現場を垣間見ることで感動。じかに得られる体験から興奮し、当会の光大会開催へのモチベーションもUP! もとより、第59回全国家の光大会に参加し、よい刺激を受けていたこともあり、やりたい内容が盛りだくさんとなりました。

フレミズの主張、記事活用体験発表、持ち寄り読書、読み聞かせボランティア講習会の伝達と、部員の出番が目白押しとなり、さらに「やさしいハンドメイド」の活動報告は、支部ごとに作品が魅力的に伝わるように工夫したことで関心を誘いました。大会の最後には、「防災ブレスレット」作りを実施。参加者120名に対応するため、本部役員と事務局が17名で事前練習会を行い、当日、家の光協会からも講師をお願いし万全の態勢で臨みましたが、思いのほか説明も聞かず黙々と始める人もいて、作業はまちまちの状態。ザワザワした雰囲気ながらも「防火クラブの母の会で」「酪農婦人部会で」と意欲あふれる参加者が多く、その後、地域に広がりを見せ続ける活動となっています。

平成30年2月、わたしに『ちゃぐりん』2018年2月号から「マイみそをつくるよ」と言った支部事務局が、突然この世を去ってしまいました。彼女は、第1

回家活グランプリ応募のさい、照れくさそうに「参加することに意義があるよね」と。わたしは、彼女のひたむきさを思い、過去から学び今日を生き、明日につながる気づき合える活動として、家活を充実させていきます。

いつも気づけば近くに『家の光』

J A西都 生活組織課

清家 祐子

わたしの家には子どものころから母が読んでいた『家の光』がありました。……が、わたし自身それを手に取って読むこともありませんでした。

しかし、それは突然訪れるもので、16年前、初めて生活指導員になったのをきっかけに、当時の女性部長から「『家の光』の『親と子の童話』の記事を使って読み聞かせを始めよう」と相談を受け、『家の光』を読み直しました。まず初めに学童保育をしている保育園に出向き、読み聞かせの話をしてみると、ぜひお願いしたいとの返事をいただき、すぐに行動に移すことができました。それから管内にある2つの小学校の校長先生にアポイントを取り、承諾を得て、週2回の「家の光読み聞かせ」が始まりました。

1年の終わりには、子どもたちからお礼の色紙が届き、「毎回何を読んでくれるか楽しみに待っています」と書かれた言葉を見て、何とも言えない感情が込み上げてきました。

また、あるときは自主活動をめざしたオルグ（リーダー）活動の「教育文化オルグ」の方々と、「わが子に贈る創作童話」の中の「タスケのとうもろこし」（2002年5月号）などを手作りの紙芝居につくり替え、読み聞かせや「ちゃぐりんフェスタ」で披露するとたいへん喜んでもらいました。この読み聞かせの活動は、当時の女性部長が3年前に亡くなるまで13年間続けることができました。支所の生活指導員の異動があっても引き継ぎながら続けてきました。

今では、それをきっかけに、女性部が集まる会議等では、毎回読み聞かせを実施しています。どこの記事を読もうかと探すのも楽しみの一つです。また、「教育文化オルグ」が中心になって、各支部やグループ活動では、「やさしいハンドメイド」のページを使っての「すずめの学校」と名付けたハンドメイド教室を随時開催しています。年間通して作られたたくさんの作品は、J A西都家の光大会におけるコンクールで展示、披露しています。このコンクールは県家の光大会の出品作品の選定にもなるので、毎年、力作ぞろいで盛大に開催しています。

年8回の女性大学「きらりときめき講座」でも、地域の方を対象に『家の光』記事を中心とした内容で講義を実施しており、毎回好評です。モップ作りなどのハンドメイドはもちろん、ドラッグストアのレシートで課税対象商品がわかるといった

学習など、暮らしに役立つ記事をつねに活用しています。

他の支所では、『家の光』に掲載されている「料理カード」を用いて、高齢者の方への月1回の配食弁当のメニューに毎回利用しています。おかげさまで今年は延べ40回、1272食を配布することができました。

またこの支所では、年2回計14回の女性部夏季・冬季座談会において、『家の光』の記事を活用して「JA改革」「地域振興」「地域活性化への切り札」などをテーマとして取り上げ読書会を行い、学習しています。今、女性部で取り組むべき課題は何か、活動のテーマを探るとき、座談会で『家の光』の記事で徹底した学習を行っています。全部員で学習し、意見を出し合って共通認識のもと、実践活動に取り組んでいます。

JA西都では、以前から農家の暮らしをよりよく、そして安定させるために家計簿記帳運動にも力を注いできました。「家計物価オルグ」を中心に、毎月開催される家計簿記帳会に参加することで、どんぶり勘定だった家計費も管理できるようになりました。

家計簿付録付きの12月号からの普及推進には、女性部と職員が一体となって取り組んでいます。組合員戸数に対し、普及率は43.1%です。

家計簿記帳会での指導は忙しい生活指導員任せではなく、部員である「家計物価オルグ」が担っています。このように幅広い女性部活動を活動分野別に専門オルグを設置して女性部の自主活動をすすめています。女性部役員経験者や特技のある方などをお願いしています。

また、一年の終わりには、手芸のページ、料理、気になる記事をスクラップして、いつでも使えるようにファイルに綴じて活用し、部員にもすすめています。

昨年、JA下関（現JA山口県）を視察したのをきっかけに、少しでもみんなが『家の光』という本に興味を持ってほしいと思い、わたし個人の抜粋ですが、「『家の光』〇月号オススメ」と題し、手作りで作成したチラシを管内の組合員宅すべてに配布しています。この記事を読んでもくれた方が、『家の光』に興味を持ち、一人でも多くの方に『家の光』を読んで心豊かな生活を送ってほしいと考えています。

また、購入されている方の中には、「積読」の方もおられると聞いています。その方がこの記事を見て、読んでみようと思われればとビニールを開け手に取ってくださるのを楽しみに、これからも毎月発刊していこうと思っています。

Yes! わたしの「家活」!

J Aかとり 指導経済部 営農生活課

石毛 明人

「石毛さんは、今度から営農生活課に配属です」。

突然の人事異動に、ビックリして腰が抜けるかと思いました。わたしは異動前に経済センターで女性部の支部担当をしていたものの、本部としての生活指導担当は初めてで、自信もありませんでした。不安な気持ちを胸に、慣れない仕事を手探りで進める日々が始まったのです。

そんなときに、女性部部長の杉山さんがアドバイスをくれたのです。

「石毛さん、『家の光』のハンドメイドをやりましょうよ！」

正直、『家の光』を“料理カード”以外ほとんど読んでいなかったわたしには、なんのことやらという感じでした。しかし、いざ女性部の総会で参加者とハンドメイド教室をやったところ、みなさん本当に楽しそうで終始笑顔なことにビックリ。わたしもいっしょにやってみたところ、「何コレ、おもしろい！」と自分でも驚きだったのです。

その出来事が『家の光』を熟読するきっかけとなり、生活指導の仕事に楽しさを見出すきっかけにもなりました。全国各地のみなさんの活動がたくさん掲載されていて、マネしたくなる内容が盛りだくさんな誌面に毎号魅了されたのです。

さっそく女性部の活動でも、次々に『家の光』のハンドメイドを取り入れていきました。「米袋のエコバック」（2014年12月号）をはじめとして、「手ぬぐい・端切れで作るかぶりもの」（2015年5月号）、「エアーパール&レザーのネックレス」（2015年10月号）、「くまモンうちわ」（2016年8月号）と、ハンドメイドの機会をどんどん増やしていきました。

そんな活動を続けていた折の2017年12月、千葉県家の光大会に神崎古原支部の椿千春さんが出場することになりました。椿さんは、こうしたハンドメイドの取り組みを食農教育や仲間づくりにも活用したことを発表し、最優秀賞に輝き、全国家の光大会への切符を手にしたのです。翌年に開催された第60回記念全国家の光大会において、椿さんは見事“家の光協会会長特別賞”を受賞し、本当にうれし

かったことを覚えています。

椿さんのサポート役として初めて参加した全国家の光大会でしたが、わたしにもたくさんの刺激を与えてくれました。とくに、JA職員による普及・文化活動の体験発表はたいへん参考になったものです。

「自分にできることはどんどんマネしちゃおう！　どんどんやってみよう！」

そう思わせてくれる発表の数々は、ワクワクドキドキの連続で胸が熱くなりました。

地元へ戻ってからまず取り組んだのは、『家の光』の見本誌にオススメコメントを貼付するアピール作戦でした。雑誌の気になるポイントを毎号手書きすることで温かみを感じてもらい、カラフルなデザインを施したり、かわいいイラストを加えたりすることで目に留まりやすくなるよう工夫し、待ち時間の多い金融店舗に置いてもらうようにしたのです。本来であれば、各店舗の職員にコメントを書いてもらえるのが一番なのですが、「まずは自分からお手本を示さなければ！」という考えもあり、現在のところはわたし自ら数店舗分の見本誌にコメントを貼付して、店舗に送付しています。ゆくゆくはJA全体にこうした取り組みが広がっていくことを願いつつ、手を動かす日々です。

ただ、そんななかでも、うれしいことはあるものです。全国家の光大会に椿さんが出場したことを見本誌のオススメコメントに記載したところ、それを見た組合員さんから『家の光』を定期購読したいというお申し込みがあったのです。「自分のやっていることは間違いじゃないんだ！」と感じさせてくれる出来事でした。

この仕事をしていると、『家の光』を読んでもいないのに「おもしろくない」と言う方も少なくありません。しかし、『家の光』をおもしろいと感じてもらうにはわたしたち職員がどれだけ組合員さんの日々の活動にアシストできているかにも関わっているのではないかと思うのです。JAに携わっている以上、『家の光』をもっと情報発信のツールとして、あるいは、情報収集のツールとして活用しなければもったいないです。全国の情報をつなげてくれ、全国のJAを応援してくれるのはこの『家の光』だということを改めて認識しました。

これからも『家の光』を通じて組合員さんが笑顔になれるJAをめざしていくためにも、オススメコメントを貼付するアピール作戦はもちろんですが、今後いっそう雑誌を開いてもらう機会や活用してもらう機会をつくってさらなるアピールを進めていきたいと思えます。

わたしは、総合事業であるJAの職員として、これまでにさまざまな業務に携わらせていただきましたが、この生活指導ほど組合員さんから感謝される仕事はないでしょう。そして、そんな生活指導に『家の光』は欠かせないものだと思います。これを教科書にしてこれからも仕事に励み、そして次世代につなげていかなければ、と思っています。

Yes！ わたしの「家活」！ さらに前進あるのみ！

『家の光』で夢がかなった

J A 遠州中央 森営農センター

鈴木 美紀

J A 遠州中央の周智郡森町内の J A 店舗では、毎年、年が明けのころに、職員が地域みなさんに声をかけながら「家の光三誌」の推進が始まります。

『家の光』をお勧めするためには、まず職員自身がお勧めポイントを伝えられなければいけません。ふだんからよく読み、金融、共済、営農など、部門や職種も関係なく、職員一人一人が自信を持って推進しています。

金融や営農窓口への来店者には、待ち時間に見本誌をお渡しして読んでいただきます。ライフアドバイザーや金融渉外担当は、『家の光』をカバンに入れて訪問先でお勧めします。『家の光』のよさを知り、それを人に伝え、毎年、推進目標を達成することができています。

「『家の光』はもう読まないからやめたいやあ」——。購読者から、ときどきそんな声が聞かれます。理由を聞くと「目が見えにくくなったから」「忙しくて読んでいない時間がないから」ほかには「袋に入ったまま積んである」「手芸品を作りたいけど難しそうだし、キットを注文しなきゃいけないから」「おいしそうな料理があるけど一人では作れない」「体操が載っているけどよく分からない」などが上がり、「『家の光』を購読していてもしかたない」とおっしゃるのです。「きっとみんな、よさはわかっているはずなのに……」と、正直悔しくなりました。

これらの言葉がきっかけとなり、『家の光』の魅力を再認識してもらうために何かできないかと、わたしが事務局を務める J A 森町女性部の活動の中で「『家の光』記事活用教室」が始まったのです。2010年、わたしは当時の女性部長と相談を重ね、「せっかく『家の光』があるんだから、料理も手芸もいっしょに作ってみよう！」と立ち上げました。

『家の光』を見ながら、料理、ハンドメイド手芸、折り紙、エンディングノート講習会、体操、防災の勉強会など、何をするか、毎回みんなで決めます。講師はいません。「みんなが先生」「みんなが生徒」と、得意なことは女性部員自らが立ち上がって教え合います。

持ち物はその月の『家の光』。内容について全員がひと言ずつ発表します。最初に読むページ、みんなに教えてあげたい記事、感想など、何でもOKです。日ごろ、

人前で話すことが少ないという方も、堂々と発表してくれます。

全国の読者からの投稿記事を読み、自分の思い出や体験を話す方もいて、そのときはとくに目が輝いているように見えました。それを見たわたしは「そうだ！ 森町版『家の光』思い出作文を書いてもらおう！」と思いつきました。この地域の読者それぞれにも、きっと思い出がいっぱいあるはずだ！

募集や発表の場を考えると、2018年度、ちょうどよい機会が巡ってきました。毎年、袋井・浅羽・森町3支部の女性部合同で行う「JA家の光クッキング・フェスタ」が、森町で行われるのです。「クッキング・フェスタ」には『家の光』を参考にした料理を中心に、地産地消料理がたくさん出品されます。そこで、料理のレシピとともに、女性部員からの“思い出作文”を募集することにしました。「内容は、作文？ 詩？ 手紙？ 俳句？ きっと難しいと集まらないし、思っていることを気軽に書いてもらうには『エッセイ』がいいのかな？」と悩みました。

そしてわたしはまた、頼れる女性部長に相談。すると「エッセイとは、かたい言葉で言うと随筆、やわらかく言うと自分が感じたまま思いのままを書くこと。自分の体験や経験、また日ごろ感じていること、テレビや雑誌を見て『私ならこう考える』というようなことを、ちょっと書いてみませんか。ふだんのおしゃべりを文字にしてみましょう」とアドバイスをいただきました。

部長といっしょに考えたエッセイのテーマは『家の光』に関することに限らず「思い出の母の味」「おにぎりの思い出・ご飯の思い出」「『家の光』と私」の3つ。「誰も関心を示してくれなかったらどうしよう」と心配したなかで、18もの作品の応募があって感激しました。

「クッキング・フェスタ」当日。料理は43品の出品があり、110人の参加者で会場は満員でした。イベントの中で、3支部長とJAの生活指導員の計7人で、心を込めて応募してくれたエッセイをすべて音読しました。

参加者は、歩んできた人生のこと、家族・友達への感謝の言葉、お母さんとの思い出、おむすびの思い出などの話を聞き、誰もが感じるであろう同じ思いに「うん、うん」とうなずいたり、自身を振り返っているようでした。目頭を押さえていた方もいました。

参加者のアンケートには「エッセイの紹介が、とてもよかった」「わたしも同じ気持ち」「みなさんすばらしい作品で感動した」「来年は袋井支部でもエッセイを募集してもらいたい」と、うれしい言葉をたくさんいただきました。半年前から計

画し、準備も大変でしたが、こうした言葉で疲れも吹き飛びました。

わたしがずっとやりたかった「エッセイ募集」——。夢をかなえられて本当にうれしかったです。

さあ、また仕事がんばるぞ！『家の光』の推進もがんばるぞ！

開けばワクワク、広がるイキイキ

J Aさつま日置 生活福祉課

笠野 恵子

わたしが、生活指導員になったのは、50歳。パート職員として畜産の仕事等に携わっていましたが、上司に声をかけられ、料理や手芸も好きだからと、軽い気持ちで引き受けました。とはいえ、50歳の新人生活指導員……20代の若い職員がスムーズにこなせることも、体と頭がついていかず、毎日が必死。でも、妻、嫁、母としての経験は負けません。この経験こそ自分の強みと、若い職員と共に、協力しながら勤めてきました。現在67歳。定年を迎え7年が過ぎますが、変わらず女性部や、生活福祉に関わる仕事を続けています。

家の光三誌は、ヒントの詰まった教本です。誌面を開けばワクワク、あれもこれも挑戦してみたくなり、展望が広がります。わたしのこれまでの活用法を、「女性部活動」と「JA職員」に分け、報告させてください。

女性部活動を盛り上げることは、生活指導員の大きな役目です。黒子役となり、女性部活動に参加したくなるような活動内容で、一人でも多くの部員を増やしたい。『家の光』に掲載される全国各地の活動を刺激に、また、「星の数ほど文化教室を」を合言葉に、さまざまな種類のグループを各支所にどんどん立ち上げました。現在、30グループ。最初は5名ほどでスタートするグループも、ロコミでよさが伝わるとメンバーが増え、1グループ30名超のグループにもなります。

料理グループのレシピは、「家の光料理カード」を参考に、一汁三菜のメニューを組み立てます。『家の光』と共に、家にある旬の野菜も持ち寄り、参加費を節約。また、「個性派野菜」の掲載された別冊付録を参考に、添え物になるような変わった野菜をJAの花壇に植え、盛り付けも工夫しています。

習った料理は、披露する場をもっと増やしたいと、地域の高齢者サロンなどで活用されているようです。また、子どもたちに食を提供する活動もしたいと、子育て広場「ピッコロ」も立ち上がりました。「ピッコロ」は、女性部として全国初の子育て支援活動だったようで、まんがルポ「みんなでできた! JA女性組織」に取り上げていただいたときには、メンバーのやる気に、さらに火が付きました。日吉支所の2階で開催しているのですが、楽しそうな声に職員や組合員さんも吸い寄せ

られ、笑顔のあふれる場となっています。おかげさまで、昨年9月で10年。10周年イベントでは、2017年9月号を参考に「ニコ・ニコおむすび大作戦」を実施。『家の光』や『ちゃぐりん』の掲載レシピも活用し、地元の新米を使い、みんなで作りました。だれが見つけてきたのか、直径1メートルほどの寿司桶に、作ったおむすびを並べ、楽しい時間を過ごしました。時代とともに、働くママが増え参加者は減っていますが、JAを若い世代に知ってもらえる場ともなり、フレッシュミズ組織も立ち上がりました。女性大学だけの活動から、目的別グループも増え、加工グループは青年部の生産物を使い、地域のイベントなどでの販売にも挑戦しています。

文化教室は女性部活動の原点。星の数ほど文化教室があれば、参加できる入り口が広がり、趣味や生きがいも増え、地域貢献への活動にもつながる。仲間と顔を合わせ、お茶飲みしながら活動すれば、アイデアも無限大。歌とお茶飲みを融合させた、歌声喫茶「ひばり」という文化教室も立ち上がりました。来月は、家の光読書会で刺激を受けた、大分の女性部さんのところへ研修視察。まだまだ、活動が広がりそうです。

次に、JA職員への活用法です。わたしは、職員に、もっと「家の光三誌」を読んでもと声をかけています。暮らしに役立つ情報や、食の話題、農に関する課題なども知れば、女性部さんや農家の気持ちを理解でき、会話のネタができる。女性部さんや組合員さんとの会話に悩む職員も多いのですが、会話をすれば、支所活動も盛り上がる、JA事業の推進もしやすくなる。朝礼での一分間スピーチでは、読んでほしい記事に付箋をつけて紹介しています。一分では足りません。いっしょに「家の光三誌」の情報共有にもなり、職員同士の会話も弾みます。人と人との関わり合いこそJAで働く魅力です。また、女性職員向けに、『家の光』の掲載レシピでの料理教室も開催しています。仕事終わりに職場で花嫁修業ができると喜ばれ、うれしいことに何人もお嫁にいきました。郷土の味や昔ながらの食も、まだまだ教えたいたいです。

まだまだ書き足りないぐらいですが、最後に一つ。わたしにはずっと避けてきたことがあります。それは、「わたしノート」の活用です。書いてしまうと、最期の日が来てしまうのではないかと不安な気持ちがありました。今回、これまでの自分を振り返ることで、ぼんやりしていたこれから先がちょっとはっきりし、ようやく書き始めることができました。残りの人生をどう生きたいのか、向き合い、女性部活動にも取り入れてみたいと思います。